

小田原史談

第42号

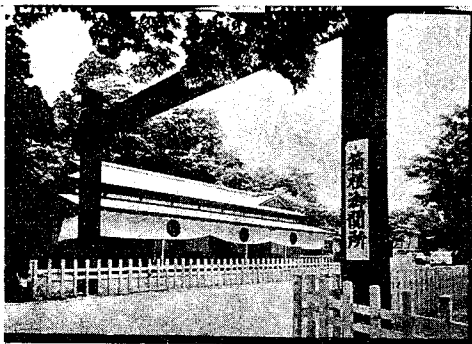
発行所 小田原市幸一丁
小田原市文化館
郷土史談会館内

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

箱根関所

御番所箱根資料館開設

さる五月二十七日、箱根関所(御番所)と箱根資料館が完成、盛大な関所びらきを行ったことは、テレビをはじめ新聞ニュースなどで報ぜられた通りである。箱根資料館の資料集収や



陳列は小田原史談会の常任理事立木望隆氏が主となつて、これに東海俊美、内田武雄、山崎益太郎、杉崎正五、清水専吉郎の各氏その他が応援、飾付には小田原市の三津木国輝氏も役所がひけてから夜

半すぎまで協力するなど、箱根関所が、旧小田原藩の管轄下にあった当時そのままを思わせるような協力ぶりて箱根町当局者に心から感謝された。

関所

箱根関所は、従来の説に従えば元和四年(一六一八)の春、幕府が大河内正綱を奉行に、初代定番士に立木市郎左衛門包貞以下を命

文化財専門委を設けよ

史談会四十年一度春季総会の席上、元副会長難波明氏が、史談会々則改訂を議したさい、本会の目的である口碑、伝説、遺跡、遺物の調査研究とある次に、保護

じて開かせた。そしてその後小田原町から五十戸三島町から五十戸の人々の移住をはかって箱根宿を構成した。

箱根の関所の性格は、寛文六年(一六六六)の淀にみるように「入鉄砲に出女」をことに重視したのをおもても「入改め」に重点をおいたようである。そのわけは、大名の奥方がひそかに抜け出すこと、鉄砲が江戸痛感しているからであろうか。

そこで提案したいのは、小田原市でも早急に、文化財保護委のほか、他都市でも設けている「文化財専門委」を設置したら、といふことである。そして調査を主とした仕事は専門委に保存保護は保護委がするようにならば、小田原市内の文化遺産も、もう一段徹底した調査と保護の実績があるのではないかと思ふ。

府内に入らぬことで、即ち大名のムホンを押えることになったようである。箱根関所は、小田原城主が稲葉氏にかわったところから、小田原藩の預るところとなつて、須田太郎兵衛家が番頭をつとめた。当時の人員構成は、番当一人、横目付一人、定番人三人(立木、井上、塚本の三氏が関所附近に居住し明治に及んだ)平土三人、足軽小頭一人と足軽十五人、ほかに人見女などが居た。そして明治二年明治天皇のおこえがかりで廃されるまでつづいたのである。

※関所見学科
大人三〇円団体二〇円
★ ★

六月行事

十字町史跡めぐり史談会

期日 六月十九日(土)午後一時
集合地 三十二区公民館
東導 中野敬次郎氏 蓮昌寺住職立花昌徳

主なコース 蓮昌寺、平成輔卿遺跡、報身寺、大久寺その他。

七月行事

千代台遺跡めぐり史談会

期日 七月十八日(日)午後一時半より
会場 上府中公民館(交渉)
講師 内田武雄氏「千代台のはなし」
史跡めぐりコース 「千代台周辺」
会費 五〇円 学生二〇円

「出女」のきびしいおきて

関所資料解説

去る五月廿七日開設され、箱根関所の箱根資料館には、関所関係の資料を中心に各種の郷土資料を展示して話題をまわっている。

差上申証文之事

次に紹介する古文書は関所手形の一つであるが、わが小田原史談会の副会長、井上英一氏の祖父か宗祖父か、に当るとおもわれる八郎右衛門などの記載がある。同時に、内容も「出女」を意味した面白いものなので一寸紹介しておくこととした。栢山村の名主次郎左衛門のひで(そでか、ひでか読みにくい)という十九才になる娘が、箱根小田原町の本陣覚右衛門の養女とまきまき、召仕女一人と共に関所を通ることになった。地もとの小田原在の名主の家から、これも関所のごく近くの本陣で身元のはっきりすぎている家へ縁づくのにも、やはり出女といえは出女に違いないというところから、かくは此の通り、やかましい証文を差出しているのである。入鉄砲に出女といわれた、その

被仰付候 為後日証文差上申候仍如件
文化七庚午年十二月
相州足郡上郡栢山村
名主
願主 次郎左衛門
百姓代 仁兵衛
組頭 清八
平兵衛
八郎右衛門
御本陣 覚右衛門
万右衛門
弥五左衛門
註 桜井史談会(会長井上英一氏)では、文化七年(一八一〇)当時の村役たち

石

清水専吉郎

幾山河越え来てここに静もれり あまつちこめて据るこの石
迫る山秀づる峯をうつす石 水したたるか声もひびくか
このもしき石のかずかず時折りに 想ひは走るその地の風ぜい
菊花石硬き素肌にあられわけて 御代ほくとしも床に飾れる
あめつちを狭庭にこめて築く石 枯山水の陰は潤はふ

市内史談会たより

飯泉の歴史をきく会

飯泉史談会 報

飯泉史談会主催、飯泉自 治会、豊川婦人会飯泉支部 共催の「飯泉とその附近の 歴史をきく」会は、去る五 月八日午後七時から、同地 公民館で開かれた。 講師は小田原史談会常任 理事の立木望隆氏で、約二 時間に亘って、川東地区一 般に関する史談にうんちく を傾けての話は、約六十名 の会衆に多大の感銘をあた えた。

久野の歴史第二集 六月末刊行

久野公民館では、久野史 談会の協力を得て、久野の 歴史第二集を近日中に発行 することになった。第二集 の内容は室町時代の久野が テーマになっているが、足 柄平野全般の当時の土豪と 村落の構成にふれている。 五号活字使用、一行四十 字 一頁十八行 五十二頁 定価 百二十円

久野地区には、古くから 宝篋印塔や五輪塔の断片が 各所に散在していて、当初 どこに建てられていたのも かすら不明になっているもの が多い。そこで、久野史 談会では久野公民館と一体 になって、これらを一箇所 に集取し、奉納二季の彼岸 に無縁供養を行うというこ とを決定した。 集取しまつて置く場所 には中久野の東泉院が境内 地の一角を提供しようとい

地方史刊行御案内

足柄・御殿場・箱根 ※史談足柄第三集刊行。足

小田原昔話

清水の郵便局

興水 正光 抜

「駅通権正前島密が官設の飛脚業を経営する事を考案し、色々の難題に打当り乍らも、血の滲む様な苦心をして、郵便事業を今日あたらしめたことは人の知る通りである。外国の郵便制度を研究して前島が帰朝したのは、明治四年八月であった。小田原の最初の郵便局は今の古清水旅館の処である。万町の柳田亀五郎と清水伊兵衛の共同経営になるものであったが、人々は「清水の郵便局」と呼んでいた。神奈川へ大磯へ小田原と離立所があって、それぞれに厩を置き馬を使用した。赤塗りの郵便馬車は駅者のほかに「奴」というのが一人乗り込んで、ラッパの音を高らかにガタガタと鳴る轍の響は文明開化のお先きぶれの如くに東海道を走って「清水の郵便局」の前に停ったのである。

馬車からおろした小田原方面の郵便は、配達夫によって配られたが、此処から西へ行く郵便物は、かつぎ

がありました。郵便物包を棒の両先につけて肩に担いで早足に歩いて話など思ひ出されます。私共の三代前二等郵便局を最初いたしました。前島密氏の軸や書類、その頃いただいたラッパ、郵便書類など震災で焼失し惜しい事でした。その後本町の小西家にて営み

一口 辞典

乱破(ラッパ)は泥棒であって泥棒でない、といった奇妙なものである。多くは甲賀か伊賀者である。オ智に長けていて戦略上大いに役立つので、小田原北条家では二百人の余も扶持していた。その頭目を風摩(ふうま)といつて、身の丈が七尺二寸もあり、身体の肉はコブ立って目は逆さに裂け、黒いヒゲがミノのように生えている。口は大きくてキバが四ツも外へ出た。頭はフクロクジミみたいて、鼻が天狗さまのよう、大きな声でどなるとその声は五十町四方にきこえたという。

この風間(ふうま)は伊賀でも甲賀でもない純粹の相模ッ子だといっているが

それより唐人町の杉浦家に移り三軒して元都役所前、今の小沢金物店の処に木造二階建の古い家屋にて戸田という人が局長で暫らくの間郵便局があり、その後現在の警察隣の郵便局となりました。

(清水家十六代当主)

北条氏と武田氏が、黄瀬川をはさんで対陣したとき夜になるとラッパが動きだした。武田方の陣中深く忍び込んで、つないである馬の綱を切ったり、火をかけた陣のうしろへ廻って、かく乱した。このため甲州勢は戦わずして引上げてしまった。などといっている。

(江戸の白浪より)

小田原地方の歴史をさぐる各地の団体

※武相文化協会(日野一郎氏ほか五十六名、五月二十三日)※練馬郷土史研究会(石山幹二博士ほか二十名、六月五・六日)以上東海立木望隆。※国宝史跡研究会(八幡一郎氏七月十八日)

四十年年度本会の行事予定

- 六月、十九日十字地区別掲 祭、バス史跡めぐり。
- 七月、十日・十一日、豆相 十二月、忘年会、史談研究史談会、大雄山一泊、十一月、新年会、講演会。
- 八月、千代遺跡めぐり史 二月、講演、総会準備。
- 八月、金子最明寺見学。 三月、四十年年度末総会。
- 九月、栢山報徳祭。久野古 行事内容の詳細はその都墳墓霊祭。 度発表いたします。なお支部の行事報告をぜひお願い致します。
- 十月、上府中見学と史談。
- 十一月、一日久野北条幻庵

史談会春季総会を終って

副会長 清水 専吉 郎

去る五月二十九日昭和四十年年度小田原史談会第一回総会を中央公民館で開催、改正規約を議定したあと、史談会十周年に当りますので、功勞者のうち第一次として中野・難波・落合の前副会長並びに事務局長の奥水の計四氏に、感謝状と記念品を贈呈しました。

会誌は年三回とし、他一回は冊子として刊行することとしました。そして年度行事を定め、まず六月の行事は六月十九日(土)午後一時、三十二区公民館に集合、二時より蓮昌寺に史談を交し、同寺住職立花昌徳師より日蓮と小田原の話と

中野敬次郎先生よりの講演を聴き、早川荘の古松のもと成輔卿の墓に在時を見聞し、栢路大久寺にて、大久保氏の墓に戦国より江戸をしのぶべく計画しました。なお以後の行事は別稿のように行ないますが、これからは実際の目的通り進み温故知新以て和氣あいあいのうちに提携してゆきましよう。

※箱根の文化財第一号刊行箱根町教委では昨年度に於て箱根の文化財第一号を刊行したが、目下は箱根町史のまとめにかかっている

小田原史談会規約

- 第一条 本会は小田原史談会と称する。
- 第二条 本会は事務所を小田原市郷土文化館に置く。
- 第三条 本会は郷土の歴史と文化を研究する意欲を昂め社会教育文化活動に資するを以て目的とする。
- 第四条 本会は第三条の目的達成のため左の事業を行う。一、講習会及座談会、二、各地区の口碑、伝説、遺跡遺物の調査研究保護その他。三、第二項の調査研究の発表。
- 第五条 会員の資格は理事会の承認を経ることを原則とする。
- 第六条 本会に次の役員を置く。
 - 一、名誉会長一名、二、会長一名、三、副会長二名、四、理事若干名、五、常任理事若干名、六、監事若干名、七、顧問若干名、八、参事若干名、九、事務局長一名、十、会計主任一名、十一、書記若干名。
- 第七条 名誉会長は理事会に於て推せんし本会の指導者として推戴する。
- 第八条 会長は理事会において選出し本会を代表する。
- 第九条 副会長は理事会において選出し、会長を補佐し会長事故ある時は之を代行する。
- 第十条 理事、常任理事は単位団体の代表者及学識経験者を以て充てる。但し理事会の決定を必要とする。常任理事は理事会の互選とする。
- 第十一条 監事は理事会において選出し会計を監査する。
- 第十二条 顧問は理事会の推せんにより会長が之を委嘱し会長の諮問に応ずる。
- 第十三条 参事は会長が委嘱し事業計画の諮問に応ずる。
- 第十四条 役員は任期は一カ年とする。
- 第十五条 本会の事務処理のため書記を置くことができる。書記は会長が委嘱する。
- 第十六条 本会は各地区に支部を設置することが出来る。
- 第十七条 支部の機構及運営の細目は支部細則を以て定める。
- 第十八条 本会に次の機関を置く。一、総会、二、理事会、三、常任理事会
- 第十九条 総会は次の事項を審議する定期総会は年一回とし必要により臨時総会を開く。一、役員承認、二、規約改正に関する事、三、予算決算に関する事、四、事業計画その他重要事項。
- 第二十条 一、理事会は会長、副会長、理事を以て構成し次の事項を処理する。一、役員を選出に關すること。二、本会の運営に關すること、その他必要な事項。ロ、常任理事会は本会の事業を企画立案し理事会の決定を経て之を行う。
- 第二十一条 総会は十名以上の出席を以て成立し理事会は過半数の出席を以て成立し、決議は過半数の同意を必要とする
- 第二十二条 本会の経費は会費、補助金寄附金を以て支弁する。
- 第二十三条 本会の会費は一八年間三六〇円とする

第二十四条 本会の会計年度は毎月四月一日に始まり三月三十一日に終る。

小田原史談会 四十年 度 役 員

会長	鈴木 十郎	鈴木 顕弘
顧問	峰 堅雅	難波 明
副会長	井上 英一	福田 敬二
事務局長	清水孝吉郎	山田 一郎
常任理事	東海 俊美	山室 貞雄
	浅見 靈風	(以上五十首順敬称略)
	内田 武雄	なお理事は総会の際確認された方々のみ発表しましたので以後の支部の分は次号に掲載いたします。
	勝野 憲一	
	佐々木金治	
	杉崎 正五	
	立木 望隆	
	東海 俊美	
	中野敬次郎	
	額田喜代春(監)	
	橋本 庄平	
	広沢 伊助	
	山崎益太郎	
	安部 龍藏	
	五十嵐 登	
	忠介(監)	
	岩田 落合 信一	
	加藤 誠夫	
	片山 文次	
	川口潤一郎	
	小泉吉之助	
	小林 泰助	
	杉山 米吉	
	杉山 康輔	

悼 伴野京治氏

豆相史談会理事、御殿場市文化財保護委員伴野京治氏は去る五月二十二日急逝されました。謹んで哀悼の意を表します。

氏は多年同市の文化財保護委員として郷土史の解明に努力され、大森氏の研究をはじめ数々の貴重な論文を記述された。遺族は静岡県御殿場市二枚橋二四八番地、伴野元由氏。

あとがき

※例年でない天候異変、天明四年とかがこうだったとか、ああったとか、新聞は色々報じているがこうして何か変わったことがあると、何十年ぶりとか、昔こうだったとか、過去を振り返って物を言う。

※天明のキキンと言え、東北で或る一村など千七百余人が餓死した。などという悲しいことを伝えているが、我が郷土ではどうだったろうか。

※今年の小田原史談会の一テーマにとりあげて、各がこれらの調査をし、秋の文化祭あたりに発表会を持って面白く思う。

※小田原史談会がどうしてもやらねばならぬ仕事の一つに、金石文の調査がある。一度にあれもこれも出来ぬ勘定だから、まず庚申供養碑と寒念仏供養塔を手わけして、台帳の作製などやったらどうかと思う。江戸時代庶民の精神生活を知る上に貴重な資料なのだから。

※前号までの葦田長平氏にかわり今回は立木望隆が編集を担当したが、次号は中野敬次郎氏か内田武雄氏が担当予定。